

谷川に鮎つりをれはほとゝきす若葉の上にをちかへりなく  
あくまでもけふはきゝけり杜鵑貴船の山にひと夜やとりて  
若かへて風になひきて高雄山こゑを惜まぬほとゝきすかな  
わか耳をうたかふばかり蜀魂ひえの谷間になきしきりをり  
雲立山歌のひしりの墓とへは聲ををしますほとゝきすなく  
雨雲のひくゝたれたる谷陰になきしきるなり山ほとゝきす  
さみたれのま近くなりし吾山になかぬ日もなき霍公鳥かな  
うの花のさかりに匂ふ垣根道こゑを惜まてほとゝきすなく  
茶摘女のうたもきこえてほとゝきすなき頻るなり信樂の里

犬

國の爲いさををたてし犬なれとくひなてかねつ狼ににて  
自らいそき足にもなりにけりつなかれてなく犬としれとも  
やすらかに犬は眠れり子をもたぬ人妻らしきものに抱れて  
いとゝしく淋しき増しぬやめる子を看護する夜の犬の遠吠  
飼主のためにたふれて石文にその名をのこす犬もありけり  
飼主の友としるらむおとなへは尾をふりてぬ門を守る犬  
芝草の上に文よむをとめ子をまもるか如く子犬たゝすむ  
かひならずゑのころ故に山里のいほのさひしき慰まれつゝ  
家守る夜のつかれやいてつらむ足打のはしうまいするいぬ

三	日	安	庄	大	廣	竹	同	福	大	岡	同	平	竹	福	竹	安	日
木	木	藤	山	谷	瀬	村	井	井	谷	田	岡	岡	村	井	村	藤	木
正	松	さ	冬	兵	久	仲	と	兵	天	よ	仲	と	仲	と	仲	さ	松
廉	子	く	子	甫	榮	城	人	甫	留	人	し	城	よ	城	よ	城	く

朝な夕なみにそゆくなるうま子らは隣の犬の子を貰ふとて  
歸りこぬ主まつとて日毎くうまやにたちし犬もありけり  
尾をふりてなつかしけにも犬の子の主迎ふる様のさかしさ  
まなひやにかよふ吾子を朝夕におくりむかふる犬の賢しさ  
おへと猶かへらぬ犬は小車にのるわか袖をかたくくはふる  
旅をへて歸りきつれば飛つきて晴着けかせりいとはしの犬  
巧にもをしへられけりおあつけときゝて淋しく餌を守る犬  
飼主の教すなほにまもるなり見かけは猛くおほきなるいぬ  
喜ひてとひつく犬のいつくしき晴着は泥に汚しつれとも  
犬すらも人に劣らぬまこゝろを國につくして名を残すなり

卯花

市原の野へにあそへは松蟬のこゑもきこえてうつ木花さく  
梅雨のしとゝふる日の垣根道たれさかりても卯の花のさく  
杜鵑をかむとたとる比叡のねのみちを埋みてうの花のさく  
夕まくれ佐保の山への道くれは垣根眞白にうつき花さく  
のほりきて木かけ淋しき山道に雪かとまかふうの花のさく  
ほとゝきすなく山道をたとりきて眞白に匂ふうの花をみる  
ほとゝきすきかむときつる古寺の垣根眞白に卯の花のさく  
ほとゝきすきかむと來つる山寺の垣根眞白にうの花のさく

庄	廣	同	同	平	竹	外	安	内	福	同	竹	同	岡	同	平	齋	山
山	瀬	岡	村	岡	村	村	藤	藤	井	村	村	田	田	岡	岡	藤	本
冬	久	よ	仲	秀	さ	と	千	美	と	仲	天	よ	し	と	し	は	る
子	榮	人	人	し	城	子	く	代	よ	人	城	人	留	人	し	ん	る











時鳥こゑうちしきる谷かはのはや瀬に鮎をつる人のみゆ  
ふる雨に色そふ若葉なかめつゝ鮎をめてけり保津の川宿  
五十鈴川口そゝかむと立よれば清き流れをあゆのさはしる  
ゆきすくる友よひとめて川狩のあゆの多きを誇るひとあり  
川狩のえものはこれとほこりにかにみするは市に求めつる鮎  
たをやめの指にもまかふ鮎のうを繪にみるたにも美しき哉

櫛

わかつまかけふゆひあけし丸鬚のてからにはゆる高蒔繪櫛

茶

名に高きあかた祭に誘はれてかへさのつとに木の芽求めぬ

若葉

まつ蟬のこゑもきこえて嵐山風になみよるわか葉うつくし

梅の實

梅のみは色つきにけりつゆの雨はれし朝のあを葉かくれに

玉

人の世にてらひけもなく少女子か指輪つくれり團子玉にて

菜漬

味よしと漬菜まほりつ二日酔やうやくさめて夕けとるとき  
おくり來し菜漬の味におもひいてゝ北山里のうはか家とふ

ひなひたる札を掲げてそこゝに菜漬あきなふ上加茂の里  
大原女かかしらにのせし花籠に菜漬もいれて市にいてゆく  
程よくもなれし菜漬の味よさに夏の朝けもいたくすゝみぬ  
ことしまた菜漬をつとにうははきぬ其味よさを誇とはして

夏湖

茂りあふ木かけうつりて木に魚ののほるもみゆる滋賀の湖  
水泳くすへしらぬ身も蜷貝ひらひてあそふしかのみつらみ  
水あむる子等はかへりて三井寺のかねのみわたる滋賀の湖  
すゝしけに滋賀の湖みゆるかなうつ木花さく山こえのみち  
うつしゑをみる心地せり比良かねの青葉につゝく志賀の湖  
青葉しける比叡の山並うつしつゝすゝしくすめる滋賀の湖  
追風に帆あくる朝の琵琶の湖まなつなからも肌さむきかな  
夕立のすきにしあとに虹の橋かゝりて涼し志賀のみつらみ  
琵琶の湖の八の名所ふねにしてめくれは涼し夏のやすみ日  
夏の日の暑さにつれて志賀の湖賑はひにけりつりに泳ぎに

時鳥遠

遠けれと一聲なるほとゝきすきゝ洩したる友もありけり  
登りゆく比えの杉村雨はれて雲のかなたになくほとゝきす  
せみの音のしけくきこえて不如歸それともわかぬ遠方の空

中	三	三	平	福	安	岡	外	中	同	安	福	森
堀	木	木	岡	井	藤	田	村	堀	堀	藤	井	年
喜	正	正	よ	と	さ	天	秀	喜	さ	と	と	子
代	廉	廉	し	よ	く	留	子	代	人	く	よ	子

正	日	平	大	岡	廣	樋	影	廣	同	竹	淺	樋	影	外	福	同
富	木	岡	谷	田	瀬	口	井	瀬	村	田	口	口	井	村	井	人
淑	松	よ	兵	天	久	貞	こ	久	仲	と	八	八	こ	秀	と	子
子	子	し	甫	留	榮	一	と	榮	人	城	よ	重	と	子	よ	人



杜鵑かなたのやまにうつりけむしはなく聲も幽かになりぬ  
時鳥なくこゑ遠くきこゆなりわか葉しける山路たとれは  
山にきて待つ人あるをほとゝきす遠き谷間のいまのひと聲  
山寺に歌まとおしてほとゝきす遠き谷間のひとこゑをきく  
かすかにも一こゑきゝつ時鳥しみたつ杉のしたかけにして  
寺守のをしへに耳をかたむけて一聲とほきほとゝきすきく  
言の葉の友ととひきてほとゝきす幽かなからも一聲をきく  
我耳をうたかふはかりかすかにも霍公鳥なく比えの山かひ  
ほとゝきすはるけきいまの一聲をまちし惱も忘れてそきく

節 水

朝夕の飯かしくにも事をかくみやこおもひてあたにせし水  
清めして用ひふるしゝ水なから道にまくには事たらひけり  
汚れたる水をもあたに捨てかねつ乏しくなれる都おもへは  
戦のにはをおもへはひと杯の水もあたにはせられさりけり  
やからみな心配りてつかひ水仇になせそといさめあひけり

野 分

雲脚をあやしみなから學ひ子を送るやかても野分ふき來ぬ  
瓜の蔓をしけにたくる田子も見ゆ野分にあれしうらの畑に  
うれしくも月の光のさしそめぬ野分の風のやゝもなき來て

小夜ふけてつもの野分に田人らは夢も結はて胸痛むらむ  
手作りの豆も胡瓜もいたましくよへの嵐にたふれふしけり  
うゑおきて翁めてつる糸瓜棚倒れはてけりよへの野分に  
やかて又米の値高くなりぬへしよへの野分のいたく障りて  
荒かりしよへの野分のおちに見せて庭の千草の倒れ伏したる  
數多き青柿のみのおちにけり野分のすきしあさののき端に  
田人らの心をちゝになやましてみる田のもをふく野分哉  
ちりほへる木々の落葉に夕日さして野分の後の大路淋しき  
豊にといのる稲穂をふきわけていと激しくも立つ野分かな  
青柿を庭にちらしてすきにけりあれ狂ひたるよへの野分も

枕

いつになくうまいしてけり老いすてふ陶物枕暫しかり來て  
なか／＼に頭いたみて眠られすくすりとときし瀬戸の枕も  
はゝとなる日をはまちをり新妻はうまれ來る子の枕作りて  
いかはかり涼しかるらむ見るからに風のふきぬく籠の枕は  
争ひし枕もいまはおしやりて子らはねむれり笑顔ならへて  
いとゝ猶淋しかりけり雨の夜になき子しのひてぬらす枕は  
親と子か枕ならふるわか家はたらはぬ中にたのしみのあり  
すや／＼とはやねいりけり幼子はそひ寝の母の手を枕にて

内藤美千代  
大谷兵甫  
三木正廉  
岡田天留  
同橋永吉  
石口八重  
樋口八重  
安藤さく  
竹村仲人  
同藤さく  
安藤さく  
石橋永吉  
竹村仲人  
同藤さく  
安藤さく  
正富淑子

齋藤八重  
廣瀬久榮  
岡田天留  
同村秀子  
外木正廉  
三木冬子  
高尾泰司  
廣瀬久榮  
外村秀子  
岡田天留



いくさ人草をしとねの枕にはいかなる夢かかよふなるらむ  
此處かしこ旅しめくりて歌枕ひろひあつむる友もありけり  
よひくゝにねすかたあしき子の枕あてかふ母の心をそ思ふ  
うたゝねのゆめよりさめて暫らくは翁さすりぬ枕せしひち  
我しらすおひえて泣し夢のあと枕なつれはしとゝぬれたり  
何となく心地よきかな水枕おもきかしらにあてゝみつれは

盆踊

山々におくり火きえてふくる夜にかもの里わの踊にきはふ  
若ものを國にめされて此のさとの盆の踊もさひしかりけり  
魂祭る夜はいつしかもふけにけり盆のをとりの場巡るまに  
踊の輪ふげゆくまゝにひろこりぬ魂送りせし人もより來て  
新しき靈まつる夜にきこえ來ぬさと賑はしきをとり子の聲  
若人にまじる女のかゑさえてこよひ賑はふ盆をとりかな  
をかしけに踊るを見れば吾も亦群にいりたき心地こそすれ  
潮あみに來つる都の客人もましりて濱に盆をとりする  
水もあり照りも程よき年なれと常ならぬ世と田子は踊らす

雨

こもりゐて文も見あきし此夕歌おもはするあめのふり來ぬ  
魂あへる友ひき留るよすかともなりて嬉しき今日の日の雨

孟蘭盆會

事しけき身もさしくりてふるさとの墓に詣てぬ盆の一日を  
新しく涙なかしぬうらほにゑ亡き子と母のみたま迎へて

壺

花させはふさひてけりなすておきし信樂燒の梅ほしのつほ

煙草

師の君は歌よむひまも銜へをり火のはやきえし巻煙草をは

煙

堂守にいはれをきゝて香たきぬけむりこもれる御佛のまへ

幼稚園

物心つきそめし子のゑかきをり智恵板ならふ園のうちにて

學校

常ならぬ世とは知るらむ學やに通ふうなるも引しまる見ゆ  
常ならぬ世には炭やく術をさへをしふとそいふ學ひやの庭

風

湯浴して庭に出ればそよ／＼と風心ちよくふきて來にけり

野徑

新しきはなたむけたる石佛たつも見えけり野へのほそみち

團扇

夏の夜のそゝろあつきの友として手離されぬは團扇也けり

同 樋口貞一人  
内藤美千代  
福井とよ  
岡田天留  
山本はるよ  
岡田天留  
安藤さく  
浅田とよ  
岡田天留  
同 岡田天人

竹村仲城  
同 浅田とよ  
樋口貞一人  
福井とよ  
三木正廉  
同 齋藤しん  
樋口八重  
庄山冬子  
廣瀬久榮



鉄

とひ來れと人かけなくてしけりあふ庭木に鉄いる、音する

女郎花

市原の野邊の草むら月さして露おもけにもをみなへしさく  
日くらしの聲もさひしき秋の野にやせ細りても女郎花さく  
籠にいけし薄ふりよくみえにけりひと本そへし女郎花にて  
石佛たてる廣野のわかれみち千萱みたれてをみなへしさく  
うらふれてさひしくすめる我宿の秋ふさはしく女郎花さく  
ひなひたる大原少女の花つとにいろうつくしき女郎花さく  
藤袴ひきたちにけり一本のをみなへしをはいけそへてより  
をみなへし露しと、なり譽ある武士ねむるおくつきのへに  
つゆしけき朝の廣野に鈴むしこのゑもきこえて女郎花さく  
秋草のしけりあひたる中にしてひときはめたつ女郎花かな  
なく虫のこゑもきこえて夕風にやさしくなひく女郎花かな  
赤あきつむれとふあきの山もとに風にゆらきて女郎花さく

鶯

日にはゆる大城めぐりて緩やかに鶯そ輪をかく空も狭しと  
案山子をも尻目にかけて舞ひ下りぬ鶯は鴉をおひ回しつ、  
す早くも餌を掴みけり磯のへを長閑に鶯の舞ふと見しまに

鶯のなくこゑすか、しはれ渡るみ空高くも輪を描きつ、  
いかばかりたのしかるらむはれ渡る青空高く舞ひあそふ鶯  
しつかなる湖の上に夕日うけて鶯はまふなり輪を描きつ、  
わをかきて鶯のまふ見ゆ軍ふね雄々しくならふ港江のそら  
聳りたつ大城の臺日にはえてゆたかにも舞ふ鶯のみえけり  
衣洗ふ女も見えつのかにも鶯のわをかく今日のあさはれ  
砂白きいそへにたちてはれ渡る青空高くまふとひを見る  
蠻人か地引綱ひくいその上にえものもとめて鶯のゑをかく  
濯物高くか、けてあふき見れば鶯ものとかに輪を描きをり  
やすらかに鶯もまふなり日の本の空には仇の鳥ふねも來て

露 滋

さま／＼の千草の色におきわけて露も今こそ盛なりけれ  
露けさに立竦み鼻虫の音を聞むと來つる野へにはあれとも  
月見むとのほる愛宕の夜はふけて尾花か袖も露しと、なり  
菊畑にそへ木たてんとおりたては袖しと、なり露繁くして  
ほの／＼とあけゆく野への薄原蝶もねむりて露しと、なり  
さなきたにかわくひまなき吾袖のいと、露けし靈祭るよひ  
脚氣やむ吾子誘ひて野路ゆけは裳裾もしと、露にぬれたる  
望月のかけをうつして我庭のすすきにしけくおける白つゆ

内藤美千代

安藤さく

竹村久城

廣瀬久榮

岡田天留

外村秀子

同村

福井とよ

伊與田徳房

岡田天留

石橋永吉

正富淑子

高尾泰司

竹村仲城

廣瀬久榮

三木正廉

大谷兵甫

同村仲城

竹村仲城

同村

外村秀子

樋口貞一

齋藤八重

堀田末尚

福井とよ

同村

樋口貞一

竹村仲城

同村

同村

同村

伊與田徳房



手折らむと花えらひひしておく露にしと、ぬれたり裾も袂も  
うゑかへてしをれし庭の草花もしけき夜つゆに甦へりけり  
なく虫のこゑもほそりて萩のはにむすへる露の繁きこの朝

琴

少女子か長き黒髪たれなからむかしゆかしき小琴かなつる  
妻琴のたへなるしらへきこえ來てたちさりかねつ生垣の外  
糸の上に届きかねたる手をのへて琴ひくちこの愛くしき哉  
床しくも小琴一つそめたちける嫁きゆく子のもてる荷の中  
床の間にむなしくたてり妹のゆきてかなしき思ひ出のこと  
をりくゝに妻もを琴をかなてけり盲の我をなくさめむとて  
床しくもきかれつるかな奥深き木の間もり來る妻琴の音は  
妻琴の音ゆかしくもきこえ來ぬをすをめぐらす室の奥より  
月すめる野を懐かしみたもとほるをりしも聞ゆ妻琴の音の  
歌聲も高きこえて少女子かかなつることのしらへ妙なり  
琴の音は暫したえたり少女子も月をみるらむひく手休めて  
取出ぬ日さへ多くもなりにけりかたみの小琴塵つもるまで  
折々はかなても見つ嫁く時もて來しをこと古ひたれとも  
獨りゐて文も見あきしつれくゝにひき試みつ小琴とり出て  
をことひく少女なつかししとやかにすめ國風の衣まとひて

殘菊

大根ひく田人もみえて霜しろき畑にのこれり小菊ひとむら  
おくしもにかはれるいろもおもしろし籬のものと菊の一本  
おくしもにうつろひなから白菊ののころかさひし山寺の庭  
みそささいなくねも寒き山かけに霜をのかれて菊の花さく  
霜白きまかきのもとに色かへてさきのこりたる白菊のはな  
白菊の花うつくしくさきにけり秋のなこりを庭にとゝめて  
紅葉ちるさひしき園にいちしるく目たちてさけり黄菊一本  
日かけおふ子猫も見ゆるまとのへにさき残りたる白菊の花  
うつろはて猶こそにほへ冬の日の庭にひと本残るしらさく  
朝しもに一入いろのまさりけり庭のかきねに残るしらさく  
人かけも見えぬ田中のひとつ家にうつろひなから残る白菊  
ちりかゝる紅葉も見えて山寺の庭にさひしくのこる白きく  
かれ草のなかに残りて畔路に匂ふもあはれ野さくひともと  
紅葉ちる中に一本さくの花さきにほふなりあきにおくれて  
一本のきくそさきたる小春日の庭のかたすみ落葉かつきて

讀書

寝るまへの一時なれと夜ことく心しつめて文をこそよめ  
朝清めをへたる室に木の芽煮て文よむはかり樂しきはなし

廣瀬久榮 同 齋藤し人 伊與田かす 福井とよ 廣瀬久榮 齋藤し人 内藤美千代 伊與田徳房 竹村仲城 同 外村秀子 福井とよ 庄山冬子 同 樋口八重 堀田末尚

福井とよ 安藤さく 伊與田徳房 日村松子 竹村仲城 大谷兵甫 同 岡田天人 三木正廉 安藤さく 石橋永吉 伊與田徳房 廣瀬久榮 影井天留 岡田天留 山本天留 岡田天留







朝良もとりのけられし庭の面にさきそめにけり秋海棠の花  
木犀のかをりたよふ庭の面にさき亂れたる秋海棠の花  
此方へとみちひかれゆく四阿のとひいしのへに秋海棠さく  
雞頭の高くのひたつかたはらにつましくさく秋海棠の花  
秋の雨に人も訪ひ來ぬたそかれの庭に淋しく秋海棠のさく

卵

酒たしむおちはのみとをならしけり鮭の卵の糟漬を見て  
とやなかにまたあたかき卵を見出で拾ふあさの樂しさ  
砂濱にあまの子ともはさわきをり龜のうみつる卵みいて  
雞はけたましくもなきにけりいまし卵をうみやしつらむ  
小山田のふせやの軒にうみたての卵ありてふ木札かゝれる  
白味もてかほを洗へり少女子はたまこの如き肌にせんとて  
幼子の身をおもふより庭鳥をかひにけるかな玉子えむため  
大なる卵をえりてわりつれば二つの黄味のつなかりていつ  
よるひるのけしめもなくて親鳥の卵ぬくむる姿あはれなり  
こよふ聲に立出でてとや見れば嬉しく今日も卵うみたり  
わか友の情うれしも病める子に手かひのとり卵たまへる

都 霰

年の瀬の人あし繁き都路をしはしかすめてふるあられかな

夜まはりの木の音もさえてふくる夜の都大路に霰たはしる  
寒き日の都の大路人あしもまはらになりてあられたはしる  
としの市賑はふ夜の都路にあはたしくもあられたはしる  
ひとしきり都大路に音たて夕かせさむくあられふり來ぬ  
長堀の河岸につなけるかきふねの屋根うちたく玉霰かな  
支那そはをうる笛の音も寒けにて霰ふるなりよるの都路  
都路のゆき來もたえてふくる夜のいらかの波に霰ふるなり  
店は皆大戸おろしてふくる夜のみやこ大路に霰ふるなり  
をさな子かよろこひさわく聲すなり都おほちに霰ふり來て  
少女子か袂かつきてさわく見ゆ都おほちにあられふり來て  
小車の窓にはらくうちつけてあられふるなり市の夕くれ  
めされゆく人のこゝろもひきたむ都大路を叩くあられに  
出盛の夜店もとみにさひれけりあわたしくも霰ふり來て  
加茂川のつみの柳北かせに靡くと見ればあられふり來ぬ  
比叡おろしけさはつりて都路に冬をつけても霰ふるなり  
清水のうてなに近くちり残る紅葉たきてあられふるなり

噂

空言とけなされもせず火なくして煙の立むいはれなければ  
浪かせを家に残していつしかもひとの噂のあととはたえけり

岡田天留  
樋口八重  
伊與田徳房  
福井とよ  
三木正廉

竹村仲城  
内藤美千代  
同 藤井とよ  
竹村仲城  
庄山冬子  
同 樋口八重  
伊與田徳房  
岡田天留  
山本はる  
内藤美千代

伊與田かす  
安藤さく  
伊與田徳房  
平岡よし  
伊與田徳房  
同 岡田天留  
同 岡田天留  
外村秀子  
山本はる  
廣瀬久榮  
伊與田かす  
同 藤井とよ  
安藤さく  
庄山冬子  
樋口貞一  
竹村仲城  
安藤さく







喜びの聲家ぬちにみちにけりいまたくましき男の子生れて  
數ならぬ身も喜びにひたりけりためしなき世に生れ合せて  
又となき今日の祝日らしおにて玉のみ聲をきけるよろこひ  
よき年に生れあひたる喜びをいひあらはさむ言の葉そなき

寒梅

庭の雪もこほりて寒き昨日今日匂ひそめけり早さきのうめ  
はたか木の中にひととめたちけり園を飾りて咲き匂ふ梅  
みたらしの水もこほれる廣前に老木の梅のふみそめたる  
みたらしの水もこほれる神苑にすかしくも梅の花さく  
詣て來し人のいふきもこほる日に忌垣の梅は清くかをれり  
遠山に初雪みえてさむき日をさきそめにけりはちうゑの梅  
襟巻にかほを埋みてかみや川にほひそめたる梅を見めくる

述懷

顧みて悔多きかなともかくもうき世の波はこえて來つれと  
臣のみち正しくふみて一すちに君につくさむ數ならぬ身も  
思ふ事皆うらうへとなるみれは我ま心の足らずやあるらむ  
充されぬ心なからもわたかまる事のなきこそ嬉しかりけれ  
今の身にかへりみすれはすきて來し茨の道も懐かしきかな  
つきくりに子らは嫁きて家の内淋しくなりぬ老のいまさら

たゝかひの續くかきりは吾も亦はたらきぬかむ己か持場に  
わひしさにたへぬ心もなこみけり詞の花をつみそめてより  
徒にうきことのみをかそへつ嬉しきふしは忘れにけり  
思ふこと思ふか儘にならぬ世と思ひなからもかこたる、哉  
うきことを忘れていつも樂しみつ魂あふ友と歌かたりして  
ともかくも子は皆人となりをへて安らけきかな老の坂路も  
師の君を杖とたのみてのほりてむいたゝき遠きうたの中山  
いつのまか白髪のかえて我乍ら老いし姿のうとまれにけり  
善につけ悪きにつけてなき親のあらはといつも思はれに覺  
思出て袖しほりけりなき親のいまはのきはにいひし言の葉  
み佛にたきてさゝくる香のかをめしひし吾も尊しとかく  
目にさはる何物もなきうみの如ひろき心をわれは持ちてむ  
うすかりし妹脊の契り嘆きつゝいつか三年を過しつるかな  
坂路を下る如くもおもはれてはや五十年のよはひへにけり  
敷島の道の教はうけなからゆきなつむ身をいかにかはせむ  
あすありと思ふ心にたよりつゝけふも空しく過しつるかな  
つくくゝと嫁きゆく子を眺めつゝ思出てけり若かりし日を  
わりなくも吾老にけりわかゝりし頃の心はいまもうせねと  
相しれる人は次々世をさりてとりのこされし老のさひしさ

伊與田徳房  
外村秀子  
安藤さく  
齋藤しん  
中堀喜代  
齋藤しん  
安藤藤  
山本はる  
正山冬子  
安藤さく  
齋藤しん  
三木正人  
竹村仲城  
樋口八重  
内藤美千代  
竹村仲城

大谷兵衛  
廣瀬久榮  
平岡よし  
同井と  
同福井と  
同同  
同同  
同同  
伊與田徳房  
樋口八重  
同同  
同同  
外村秀子  
同同  
石橋永吉  
平岡よし  
安藤藤  
竹村仲城  
同同



何ことも神のさためとしりなからみたれかちなる我心かな

落葉

木枯のかせのまに／＼こゑたて、都大路をおち葉はしれり  
木枯にもてあそはれて法の師か經よむ窓に木の葉ちり來る  
下女かはきなつむまでつもりけりよへの嵐にちれる落葉は  
葉にや拾ひあつむる少女子はみちにちりしくいてふの落葉  
大寺のいてふの落葉かきこえて吾庭すみに高くつもりぬ  
はゝき持つ少女か袖にはら／＼と落つる紅葉の色よき哉  
はきよするあとより又もいろあせし楓の紅葉風にちり來る  
うつたかくつもる落葉に風ふきてかろくまひたつ森の下道  
やり水をせきとむるまで積りけりよへの嵐にちりし落葉は  
少女子は色さま／＼の落葉をは拾ひあつめて書にはさめり  
拂ひても／＼又ちりしきてはひりの庭の落葉わひしき

鏡

少女子ははしめて結ひし桃われのかみうつしをり合せ鏡に

心

いさゝかの事にも涙さしくみておのか心のよわさしらるゝ  
けふよりは心つよくもなりにけり我世をゆつる男うまれて

太刀

道のへに軍事して遊ぶ子もとしかさなるか太刀をはきたり  
をり／＼は出して老のほこりけり家に傳はる古きやき太刀

煙

またゝきもせずに見あけぬ幼子は父のくちよりいつる煙を  
幾千人いそしむならむ工場の筒のけふりは夜もたえずして

柱

寺男ゆひさす見れはすきやなるとこのはしらは南天にして

軍歌

軍なすつはものたちや唄ふらむ森のあなたの勇ましき歌

鉞

かせ寒き師走の町の髪床にはさみの音のせはしけにする

寶

事ありて君よりうけしみさかつきなかくつたへむ家の寶と

硯

するすみのかをりもそひてめてたかり吾文机をかさる硯は

正 富 淑 子

安 藤 さ く

齋 藤 し ん

伊 與 田 徳 房

山 本 は る

白 井 朝 子

平 岡 よ し

内 藤 美 千 代

中 堀 喜 代

伊 與 田 徳 房

樋 口 八 重

安 藤 さ く

伊 與 田 か す

伊 與 田 徳 房

同 人

竹 村 仲 城 人

同 人

山 本 は る 人

同 人

庄 山 冬 子

中 堀 喜 代

齋 藤 し ん

安 藤 さ く

外 村 秀 子



昭和十六年

新年雪

年ほきのつとひ終りて友か家をいつれは肩に雪ふりかゝる  
若水をくまむとせとにおりたては板井も半ゆきにうもるる  
新としのよことを終へて友か家の庭の雪をはほむる朝かな  
浦人の魚見の松におもしろく雪のかゝりてとしあけにけり  
新しきとしの始をかさりけり庭ましろにもゆきのつもりて  
若人はいさみたちけり信濃路の雪のたよりに年をむかへて  
おもはずもゆきのけしきをめつるかな初詣する小車にして  
万才の鳥帽子にふれてしつれけり門松の上にもふれるしら雪  
万才のつゝみの音も羽子の音もきこえずなりてつもる白雪  
かと松も一入きよくみゆるかな年たつ朝のゆきをかつきて  
あらたなる光を見せて門松のみとりの上にもふるしらゆき  
とそのゑひさまさんとして窓おせはいつしか庭に雪眞白也  
新しきとしの始のはつ雪ははつかにふるもうれしかりけり

隣組

新しき心かまへにしたしさをいよゝましゆくとなり組かな

隣とちゆき來も繁くなりけり隔ての垣はかたはかりにて  
おのか身のことはわすれてとなり組互につくすこゝろ尊し  
月々につとひかさねて隣組いつかへたてもなくなりけり  
まこゝろをこめてそきほふ隣組なかきたもとも筒袖にして  
垣を去りみそをうつみてとなりくみとも草花うるゝ此頃  
となりくみ初のつとひにはからすも同じ縣の人も見いてぬ  
真心をこめてましはるとなり組つとめはたさむ掟もありて  
いやつよくいやさかえなむ隣くみ手をひきあひて一つ心に  
をりくりにまをしあはせて隣組事ある時のそなへをそする  
つきくりに隣へ文をまはすなり旗あくるにも炭くはるにも  
おのつから見榮も忘れて親しみの日々にましゆく隣くみ哉  
いにしへのとなり組にもまさらせむ心一つに助けあひつゝ  
となりとち心あはせてまめやかに町もまもらむ國も守らむ  
幼子も大人をまねてとなりくみ仲よくあそぶ昨日けふかな  
何ことも心あはせて國の爲つくさむとするとなりくみかな  
事しあらは相圖にせんと隣くみ鳴子のつなもひき渡しけり  
教へられ助けられつゝとなりくみたゆまずすゝむ一筋の道  
となりくみ頭に吾をおしてけり二十年餘りこゝにすむとて  
軒なめてすむかひのある世となりぬけふ陸しく集ひ始めて

福井とよ 庄山冬子 竹村仲城 樋口八重 影井こと 樋口貞一 伊與田徳房 竹村仲城 伊與田徳房 廣瀬久榮 岡田天留 福井とよ 正富淑子

伊與田徳房

庄山冬子 大谷兵甫 浅田とよ 中堀喜代 安藤さく 岡田天留 平岡よし 岡田天留 樋口八重 廣瀬久榮 浅田とよ 廣瀬久榮 伊與田徳房 樋口八重 伊與田徳房 安藤さく 内藤美千代 福井とよ 樋口貞一



隣組手をとりあひてたすけつ、いよ、はけまむ持場、に  
忙しきまに早くれぬ町の爲けふは三たひもおなし文來て

としの始に神詣して

新しき木の香もそひてすか、し初日か、やく滋賀の大宮  
廣前に神籤をひきて年の幸よろこひあひぬ産土神の宮  
ふりかゝる雪に我身をきよめつ、初詣せりすみよしのみや  
ほきにくる客人もなき新としをやからと共に神まうてする  
初みけを神にさゝくるはふり子のすかたも清し新としの朝  
新しきとしの初日に詣て來てこゝろ清むる神のひろまへ

翁

新しきおきてしかれて酒このむ翁のかほのさひしけに見ゆ  
子をほきて友のおこせしおきものは扇をかさす翁なりけり  
若人にまけしと腕をまくりけりとなりの翁こしはまかれと  
みいくさに従ふ吾子をしのひつ、翁は夜こと蠅やなふらん  
垣こしにきく言葉にもそのかみのしのはるゝなり隣やの翁  
けふも亦のとかに糸をたるゝなり隣の翁はうらのななかに  
碁仇の翁は又もとひて來ぬきのふいかりてかへりゆきしか  
いまいひし事を又もや聞かへしうとまるゝまてなりぬ翁は  
子と孫にとりまかれつ、長髯をなてゝ翁はむかしかたれる

つとひして歌の道とく師の君のかしらの光あふき見るかな  
この村の生字引ともいはれけり世にもまれてふ齡へし翁  
いへのわさあ子にゆつりてふるさとに心安くもくらす老人  
若人はいくさにいてゝうまこらと家もる老の忙かしけなる

松間鶯

梅のはなさくとなりより我庭の松にうつれるうくひすの聲  
春雨のけふる並木の松か枝にうくひすなけりみさゝきの道  
みねちかき松にうつれり鶯はふもとの花をひとにゆつりて  
さく花の雲よりうへの山松にしらへ高くもうくひすのなく  
あひきせし人はかへりていそやまの松のはやしに鶯のなく  
朝かすみのとかになひく山の端の松の林にうくひすのなく  
うくひすの初音うれしくきゝてけりすきやの軒の松の梢に  
鶯のこゑにみやれはつき山のまつの木の間を傳ふかけ見ゆ  
ひえのねを眺めてたてはかも川の堤の松にうくひすのなく  
こゝちよく春風渡る松原にこゑはりあけてうくひすのなく  
朝日かけさしそふ庭のまつか枝になく鶯のこゑののとけさ  
やま松の奥よりけふもきこえけりいとものとけき鶯のこゑ  
蜩うりすきゆくかけもうちかすむ栗津松原うくひすの鳴く  
朝またきすきやの庭に來て見ればまつをはなれぬ鶯のこゑ

齋藤としよ  
福井とよ

三木正康

庄山冬子

影井こと

平岡よし

外村秀子

山本はる

庄山冬子

外村秀子

山本はる

樋口八重

安藤さく

岡田天留

同

伊與田徳房

同

堀田末尚

伊與田徳房

平岡よし

同

庄山冬子

福井とよ

安藤さく

伊與田かす

平岡よし

三木正康

森きぬ



うす霞たなひく浦の松原にひゝきわたれりうくひすのこゑ  
春はやき出湯のさとの松林うくひすきゝつそゝろありきに

人形芝居

かけにゐて裾さはきするをのこにも手を叩かなむ人形芝居  
淨瑠璃をこのむあかたの母つれて人形芝居おもしろく見る  
魂のいりたることし人形のなきみわらひみたくみなるふり  
太棹の三味の音さえて人形のふり面しろみいきもつかれす  
浪華津のほりなりけり人形のふり巧みなるこれの芝居は  
人形を心のまゝにあやつりて妙なる手ふりみするものかな  
かたる人操つる人にかされてをとるひとかた面白きかな  
人形の芝居を母に見せんとてなにはの町をいそぐとゆく

春浅し

濯き物かくるやかても氷りけり春たてりとは名計りにして  
なやらひの豆もほとひて残りけり春また浅き庭のかたすみ  
わか庭の梅はさけとも鶯もいまた來鳴かすはるあさくして  
わか庭に年々來なくうくひすもまたおとつれす春浅くして  
二つみつ梅はさけともつくはひの水はこほれり春浅くして  
蹲ひの水はけさまた氷りけり春とはいへと名はかりにして  
下婢がまきつる水はけさも亦はや氷りけりはるあさくして

喧し

うつしゑを見る場にして心なくさゝやく聲の耳にかしまし  
吹く風にほしものおちて喧しくさわきたてけりとやの庭鳥  
歌思ふ窓のへ近く集ひ來て遊ぶうなるのかしましきかな  
うた思ふ耳にかしまし隣やのラシオの音の聲の高く響きて  
我かちにおされくてゆく人の聲のかしまし踊りみむとて  
やむ身には殊にかしまし隣家のラシオの音のけふも高くて  
ねつかれて困るをりありとなりやの犬のほゆるか喧くして  
隣家もかしましからむ庭とりの朝はやくより騒きたつれば  
道のへに高麗の女の打よりて何かたるらむいともかしまし

田家梅

霜よけも未たはらはぬ茶畑のこゝにかしこに梅さける見ゆ  
初午のつゝみの音ものかにてさとの遠近うめさかりなり  
漬物の桶のならへる加茂のさところにかしこに梅の花さく  
大和路は麥の畑ふむ人見えてところくゝにうめの花さく  
水車めくる田中のひとつやにかをりもたかく梅のはなさく  
梅の花さきつゝきけり靜なる山田のさとのふせ屋めぐりて  
とりの聲のとかにひゝく田中の中のわらやの軒に梅の花さく  
水車しつかにめくる小田中のふせやの軒にうめのはなさく

内藤美千代  
山本はる  
竹村仲城  
樋口八重  
福井とよ  
同  
同  
平岡よ  
岡田よ  
白井朝子

岡田天留  
中堀喜代  
齋藤しん  
竹村仲城  
樋口八重  
安藤さく  
同  
平岡よし  
伊與田徳房  
福井とよ  
平岡よし  
樋口八重  
高尾泰司  
平岡よし  
山本よし  
平岡よし  
中堀喜代







朝はやく神詣するみちにして桑の芽におくはるのしもみる  
若草もまはらにもえし里川のつゝみにけさは霜のおきたる  
長堀のきしの柳はめくめともはしの上白くしもそおきたる  
紅梅もはやりそめし吾庭の芝生のうへにけさはしもおく  
昨日しもおほひ除きし牡丹の若芽にしらくしものおきたる

相撲

立あかるやかて相手はまろひけりくみたるほての腹櫓にて  
相撲小屋わるゝはかりにとよめきぬ小き方に團扇あかりて  
ひろまへの素人すまふにきはひぬ力をほこる老もましりて  
人の波たちさわきけり土つかぬほてのたふれし今の角力に  
うふすなの森につとひて草相撲とりきそひけりさとの若人  
打ならず櫓太鼓に夢さめてけふの角力のおほいりをおもふ  
勝名乗あくるやかても雨の如すまひの場にはおりふり來ぬ  
おもしろき取組あまたそろひたるけふの角力に人の波よる  
またきより櫓太鼓の音たてゝすまひの場にひとをよひけり  
産土神の森に集ひてすまひけり年嵩の子かほてとなりつゝ  
岡崎の園にすまひを見し子らかほてのまねする歸るさの道  
いかめしき父も笑顔に見入けりうま子二人に角力とらせて  
幼子とすまひてけふはいつになく汗しみにけり雨の日の晝

しめはりし化粧まはしの若きほて場に登りて人目あつむる  
とひいりに團扇あかりて村人のさわきたちけり宮の角力に

山寺花

みほとけに甘茶たむくる山寺の庭のとかにもさくら花さく  
ひかしやま入あししけし清水も吉水てらもはなさかりにて  
みあかしのゆらくも見えてさき匂ふ花にうもるゝ山の古寺  
折よくも花のさかりにあひにけり法の會ひらく山寺に來て  
さく花の雲をしるへのほりけりはる酣のみねのみてらに  
とふひとのたえてなければ櫻花さひしくさけり山寺のには  
とふ人は少なかりけり山寺にいまをさかりと花はさけとも  
うくひすの聲もきこえて山寺の杉の木の間さくら花さく  
さきにほふはな見る人に賑はひぬつねはさひしき山寺の庭  
法の師もすまてあれたる山寺のには一本さくらはなさく  
常の日はとふひとともなき山寺も花に賑はふ昨日けふかな  
巡禮のいこふ姿ものとかなり花さかりなるやまてらのは

落語

たくみなるおとし話は終りけりきく人々のわらひのこして  
おとし話きゝてとけけり忙しく一日はけみて凝りし肩さへ  
人は皆笑かほならへてきゝいりぬいとたくみなる落し話を

石橋永吉  
伊與田徳房  
同 藤美千人  
内藤美千人  
岡田天留  
竹村仲城  
岡田天留  
伊與田徳房  
安藤さく  
外村秀子  
福井と  
竹村仲城  
同 人  
同 人  
同 人  
山本冬子  
山本冬子  
竹村孝子

影井こ  
三木正廉

山寺花

伊與田かす  
福井と  
高尾泰司  
庄山冬子  
三木正廉  
浅見英子  
竹村孝子  
樋口八重  
伊源徳房  
同 人  
白井朝子  
伊與田徳房

落語

福井と  
竹村仲城  
岡田天留



きゝなれぬ東言葉のくちはやみ話のさけもときかねてけり  
おもしろみきゝふけるまにはてにけり浪華言葉の落し話は  
むつかしき顔と也覺はなしかは笑ひくつれて聞けはきく程  
うきこともしはし忘れてきゝてけりよせの夕のおとし話を  
おもしろく笑はせ乍らいつしかも話はおちとなりける哉  
巧にも笑はせにけりはなしかはとりとめもなき事を語りて  
をかしさに涙こぼして笑ひけりけふのラシオのおとし話に  
つきくにおとし話のきこえ来てこよひのラシオ母の喜ふ  
雨の夜に遙々來つるかひありきおとし話のおもしろくして  
をさな子は高わらひしてよろこひぬ母のきかする落し話に  
傷つきし兵士のみか吾等さへおとしはなしに慰さみにけり  
ひとりゐのなくさとなりぬ此夕ラシオのおくるおとし話は  
面白き落し話にのせられて夜のふくるをもしろてきゝけり

社頭落花

うふすなの鳥居くゝれは昨日かもめてし櫻の早もちり來る  
ひろ前の櫻のはなはちりにけり春雨けふるすみよしのみや  
つはものをまつる社にぬかつきてちり來る花に涙さそはる  
新しきみたまをまつる靖國のゆにはさひしくさくら花ちる  
新みたままつる日ちかき靖國の神のゆにはに花ちりしきる

いさきよくちり來る花に眠りますみたましのひぬ靖國の宮  
朝きよめつかふるきねか袖の上にしきりにかゝる花吹雪哉  
稻荷山しみたつ杉の木の間よりちる花見えて春はくれゆく  
大鳥のはるのみまつり雨ふりて神かきしろく花のちりしく  
詣て來てはゝきめ清き廣前にぬかつきをれば花のちりくる  
ひろまへのにぬりのはしも眞白なりさくら花ちる住吉の宮  
御手洗の水もたちまち埋れけり雨よふかせに花ふゝきして  
やすくにのみやにぬかつく幼子のそてに櫻の花ちりかゝる  
やむはゝのいえむをいのる廣前にさひしくもちる山櫻はな  
あめはれし朝に見ればみ社のひろまへ白く花のつもれる  
さりかてに友とイむみやしろのゆふへ淋しく花のちりくる  
大みゆきをろかみまつるおいのせに櫻ちりかふ靖國のみや  
みたらしの水をくまむと立よれば二片みひら花のちりらく  
學ひ子か朝きよめする神苑につゆをふくみて花のちりくる

骨董

持人はかはりゆけともいつまでもその名と共に残る陶もの  
此度またわるあき人にはかられて高くかひけり新しきしな  
古ひたるしなをあつめてこかねにもまさる寶とほこる吾父  
やとぬしは古きしなくもちいてゝ鼻高々と人にみせけり

庄山冬子  
同村仲城人  
内藤美千代  
平岡よし  
竹村仲城  
影井はと  
山本はる  
同興田徳房  
伊與田徳房  
外村秀子  
日木松子  
正富淑子  
岡田天留  
白井朝子  
齋藤しん  
伊與田徳房  
山本はる

福井と城よ  
竹村仲城  
同橋永吉人  
石田天留  
岡田朝子  
白井英子  
浅見秀子  
外村秀子  
同富淑子  
正富淑子  
山本はる  
伊與田徳房  
同同  
同同  
内藤美千代  
竹村仲城  
安藤さく  
同同







ふく風になひきてす、し玉たれのひまよりみゆる庭の吳竹  
打水のつゆそふ庭のくれたけに夕す、しきかせかよふなり  
はしゐして見るか涼しさふく風に竹の葉末の露もこほれて  
若竹の巻葉ゆすりて吹くかせの文よむ窓にいるかす、しさ  
ゆあかりのはた心地よし吳竹を靡け、てふきかよふかせ  
吳竹の葉末をわたる夕風にあつさわすれてはしゐをそする  
しけりあふまとの若竹あさ風に露もこほれて涼しかりけり  
くれたけをわたる夕風音たて、す、しかりけり四阿のうち  
若竹のつゆをこほしてふく風のす、しかりけり朝とての庭

歸還兵

先たちし友をいたむかかへり來し武夫の姿さひしけに見ゆ  
君か爲しなむ命をなからへて歸りしことのはつかしといふ  
益良雄は歸る體ても抱きあげぬ召されし後にあれし吾子を  
ふるさとの人にまみゆる兵士もいたて負るや苦しかるらむ  
かちときをあけて歸りしつはものは縣々のほこりなりけり  
二年を君のみためにつ、とりてかへりしひとの姿たふとし  
國の爲めしひてかへる兵士もやさしき妻によみかへるらむ  
幼子は恥らひなから見あげけりけふ歸り來し父のおもわを  
うふすなの宮に詣て、かへりこと先申すなりますら武夫は

勇ましくかへり來にけり兵士はのひし鬚をは家つとにして  
なきものと思ひし吾子は嬉しくも務果してけふかへり來ぬ  
なみならぬ功をたて、歸れともいろにもみせぬ兵士たふと  
功をは日やけの顔にあらはしてかへり來にけり兵士のと  
戰のにはに三年をすこし來てけふつ、かなく歸るつはもの  
數々のいさを、つとに軍人けふめてたくもかへり來にけり  
つ、かなくかへり來し子を伴ひて先ぬかつきぬ神のみ前に

都首夏

加茂川の踊のともしゆく水にかけのうつりて夏めきにけり  
す、しけにひとへ衣の晴着きて祭見にゆく夏は來にけり  
かも川のなかれのいろもすか、し都大路に夏のたち來て  
美しく大路の並木みつえさして風の涼しき夏は來にけり  
うすきぬをかされる店もみえそめて夏めきにけり都大路は  
ゑひかさも並木のかけに見えそめて夏めきにけり都大路は  
少女子のゑひかさかさしゆく見えて夏めきにけり都大路は  
圓山のその、さくらも葉となりて都ははやも夏めきにけり  
きのふけふにしき魚うるこゑもして夏めきにけり都大路は  
あを、と並木のわかさはさす見えて都大路に夏は來にけり  
金魚うるこゑもす、しく聞ゆなりみつえさしたる都大路は

白井朝子  
竹村仲城  
同人  
森年子  
伊與田かす  
森與田  
平岡よし  
同日木松人

伊與田徳房  
竹村仲城  
伊與田徳房  
堀田末尙  
福井とよ  
淺見英子  
樋口八重  
伊與田徳房  
同人

中堀喜代  
庄山冬子  
安藤さく  
岡田天留  
平岡よし  
日木松福  
宮崎

外村秀子  
庄山村冬子  
白井朝子  
影井徳と  
伊與田徳房  
同山人  
竹山冬子  
中村仲城  
森喜代  
樋口八重



なき叫ふ乳子すかすまもなかり鳧人のこみあふ中をゆく時  
迷ひ子もあまたありてふみ祭をみむとてつとふ人こみの中  
つはものゝいて、ゆくらし驛中こみあひにけり送る人にて  
いつ來ても驛騒かし吾勝に汽車にのらむときそひあひつゝ  
朝夕のうまやゝはのりおりの人そこみあふ恐ろしきまで  
人波におされゝてゐな人つれたつ友をよひなからゆく  
物凄くひとこみあひて休日はきさも電車ものられさりけり  
人込にもまれゝて困りけりゆくにゆかれす歸られもせて  
み祭のすきにしあとのさわかしさ迷子たちのなき聲もして  
つはものを送りむかふる人々に驛はいたくこみあひにけり  
法の會にあかたの人のまうて來て都の町はこみあひにけり  
みまつりの列拜まむと遠近の人のより來てこみあひにけり  
ゆきもえすもとりもならて暫らくはもまれゝつ人波の中  
めされゆくつはものおくる人波にもまれて我も萬代よはふ  
かたりつゝ來つる友をもいつのまか見失ひけり人こみの中  
休日に驛にくれはひとあまたかきをつくりて札もかはれす  
湊 梅 雨

竹 村 仲 城  
庄 山 冬 子  
正 富 淑 子  
福 井 と 福 子  
山 本 は 福 子  
宮 崎 福 子  
内 藤 美 千 代  
影 井 井 口 八 重  
福 井 井 口 八 重  
樋 口 八 重  
同 橋 永 吉 人  
石 橋 永 吉 人  
岡 田 天 留 吉 人  
淺 見 英 子  
同 與 田 人  
伊 與 田 人  
福 井 人

いて入のふねに賑ふ大坂のみなともさひしきみたれのころ  
大船のかけもうすれて湊江にけふもいふせく五月雨のふる  
五月雨にふりこめられて湊江にうきね重ぬる旅そのうき  
いて、ゆく舟見送りていと、猶袖ぬらしけりさみたれの空  
積荷する丁のこゑもしめりけりさみたれくらきあさの湊江  
友のゆくふね見おくりてすめは港をくらくさみたれのふる  
さみたれにふりこめられて湊江にけふも空しく泊る舟みゆ  
荷を運ふ小舟の影も見えずして港さひしくさみたれのふる  
橋立のまつもけふりてけふもまた宮津の港さみたれのふる  
こよひまたふる五月雨に目印しの火影もかすむ門司の港江  
いてゆきし舟の忽ちかけきえて港しつかにさみたれのふる  
さみたれのなかめもやみし港江に人足かろく積荷する見ゆ  
梅雨のはれましはしを積荷すと水手は騒けり舟出すらしも  
五月雨の又もふり來て港江のふねのかけさへ打けたれけり  
から國の大臣むかへて賑はひぬ五月雨はれし神戸みなとは  
舟出する友を送れは湊江にわひしきそへてさみたれのふる  
此處かしこ舟垢おとすあま見えぬつゆの長雨もはれし湊に  
ほかけふね湊を出る影見えてけふ嬉しくもはるゝ五月雨  
外國の客人のせているふねにみなとにきはふつゆはれの朝

石 橋 永 榮 吉  
廣 瀨 久 榮 吉  
堀 田 末 尙  
安 藤 喜 代 尙  
中 堀 喜 代 尙  
正 富 淑 子  
日 木 松 子  
大 谷 兵 甫 子  
福 井 朝 子  
同 井 朝 子  
白 井 朝 子  
安 藤 朝 子  
宮 崎 朝 子  
伊 與 田 德 房  
同 與 田 德 房  
岡 田 天 留 人  
同 田 天 留 人  
外 藤 村 秀 子  
齋 藤 村 秀 子  
二二七







大寺に業をつむなり法の師は雲と水とに身をまかせつ、  
雲水のゆくへはてなき法の道きはめむとして日毎つとむる  
名も高きひしりもいてぬ雲水の苦しき業をつとめをさめて  
なみならぬためしにあひて法の道みかく法の師尊かりけり  
師とたのむ人のゆるしをうるまでは動かさりけり法の筵を  
いつこまで師をは求めて行ならむ野こえ山越物こひをして

夏 月

かも川のすゝみの床にくつろけは下ゆく水に月もうつれり  
蚊やり火の煙細りてふくる夜のまとにさし入る月の涼しさ  
高殿のをすまきあげよゆふ立のはれて涼しき月のかけ見む  
おもはずも夜をふかしけりかも川の涼みの床に月を眺めて  
蟬時雨いつしかやみてうふすなの森にすゝしく月の影さす  
野風呂たく煙の末に三日月のほふもすゝし夏のよのそら  
暫しとて戸さゝぬ閨の蚊帳の中にさし入る月の影の涼しさ  
蓮葉につゆの玉おくいけの面をすゝしくてらす夏の夜の月  
さみたれのはれし青田にこの夕すゝしくうつる月の影かな  
池水に宿りてすゝししけりあふ木の間をもるゝ夕月のかけ  
淀川のつゝみの柳あめすきてすゝしくかゝるなつのゆふ月  
夕風の涼しくわたる木の間より見えみかくれみ月の影さす

伊與田徳房 山本はる 大谷兵甫 安藤さく 竹村仲城 白井朝子 竹井朝子 岡田天留 日木松子 宮崎福子 伊與田徳房 同 三木正廉 安藤さく 福井大郎 白井朝子 同 森きぬ子

小車の窓よりみればすゝしくも青田のおもに月のうつれる  
夕浴みし子らは歸りてまさこ路を涼しくてらす夏の夜の月  
夕立のはれにし後の月かけはみにしむはかり涼しかりけり  
雨あかり木々の葉末のつゆの上にやとりて涼し夏のよの月  
ゆあかりの袂を風にふかれゆく野みちすゝしき夏の夜の月  
暑くして寝られぬまゝにとをくれは空に涼しき夏のよの月  
孫らにかやを被ひてしつかにもをすこしに見る夏の夜の月  
此處彼處あくら移してふくるまで友となかむる夏のよの月  
たへかたき暑さに閨の窓あけてさしいる月の影を見るかな  
ひるのまのあつさをさけて夜立せし山路涼しき月の影かな  
虫誘ふ火かけもきえて小山田のいなはをてらす夏のよの月  
枕へにいり来る月のかけすゝし夜かせに笛の聲ものり来て  
涼しさを目にも示してやり水の瀬にくたけゆく月の影かな  
加茂川のきしの柳にかせ見えて月かけすゝし夏の夜のそら

子 守 唄

子守唄いつかいひきにかはりけり添乳の母や先ねいりけむ  
膝の子のためにうたひてみつからもねむけ催す子守唄かな  
なきし子もいつか夢路を辿りけむ母か添乳の歌もとたえぬ  
つとめする嫁のかはりに子守して昔の歌をうたふこのころ

同 伊與田かす人 廣瀬久榮 同 端敏子 同 浅見英子 山本天留 岡田はる 同 宮崎福人 齋藤しん 正富淑子 大谷兵甫 高尾泰司 竹村仲城 山本はる 宮崎福る 山宮はる























秋の田の實りいかにと思はれぬつゆにも似たる雨の續きて  
濯き物つるし、まゝに日數へてけふもいふせく秋の雨ふる  
採にさへ出られさり鼻無花果のうみておつれと雨の續きて

防 諜

こゝろなく人とかたるな國をうる醜の奴もありとこそきけ  
何氣なくかたる言葉もあやつりの糸に懸りて仇となるてふ  
心あふ友と語るもこゝろしてかろくしくは口なひらきそ  
ひたすらにつゝしみあはむ何ならぬ言葉のはしも禍のもと  
口かろく國のひめこと語らしなうの目鷹の目光る世なれば  
わつかなることももらすなまはしもの多きはいまの戰の常

社頭紅葉

紅葉のいろこそはゆれゆたかなる初穂さゝくる御祭のには  
みやしろの檜皮の屋根に霜見えて紅葉した照る神のひろ前  
かむなきの白き衣にいろはえて紅葉うつくしかみの御園生  
忌垣にはさくも匂ひて貴船山かつら黄葉の御まへかされる  
柿をうるおうなも見えて坂本のやしろの紅葉今さかりなり  
坂本の日吉の社に詣て來てみはしのもともみちめてけり  
瑞垣の紅葉うつくし秋祭つかふるきねの衣にうつりて  
友と吾つき來る鹿をおひなから春日の宮に紅葉めてけり

御手洗の水にうつりて紅葉の燃えたつ如し産土神のもり  
常磐木の中にまじりて紅葉のいろうるはしき神のみやしろ  
静けさのなかにあけゆくみ社の齋場の紅葉ことにうつくし  
加茂の宮奈良の小川の清き瀬にうつる紅葉のうつくしき哉  
朝霧のはれゆくまゝにみ社の木の間に匂ふもみちうつくし  
常磐木はえたをかはして御手洗の川の底にも照る紅葉かな  
名に高き松もひとしほいろはえて紅葉しにけり住吉のみや

偲 英雄

仇國に鹽を贈りし益荒雄のこゝろのほとそゆかしかりける  
今にして阿彌陀か峯にしつまれる神の功のたふとさをしる  
名を聞けばやかて泣く子も黙しきと聞く丈夫のほしき此頃  
城山にねむれる人をしのひつゝたち去りかねつ洞窟のまへ  
梅の花籠にさしてたたかひし人のこゝろのゆたけさおもふ  
大君のみあと慕ひし益荒雄のまさはおもふ今の世にして  
情あるものゝふりをたゝへつゝ春日のやまの松かせをきく  
今はなきますら武夫に見せまほし亞細亞を照す皇軍のさま

古 寺 萩

松風のこゑもささひしき古寺のはひりのみちは萩はらにして  
古寺のいけのはちすは實になりて岸のいと萩今さかりなり

安藤	浅見	中堀	福井	三木	石橋	廣瀬	三木	大谷	伊與田	日木	同	竹村	樋口	山本	竹村	福井
さく	英子	喜代	とよ	正廉	永吉	久榮	正廉	兵甫	徳房	松子	人	仲城	八重	はる	仲城	とよ

岡田	今北	岡尾	石橋	中城	堀田	宮崎	齋藤	竹村	同	福井	樋口	伊與田	日木	浅見	山本	堀田
留子	静賀	多吉	永吉	喜代	末尚	福	しん	仲城	人	とよ	八重	徳房	松子	英子	はる	尚

岡田	今北	岡尾	石橋	中城	堀田	宮崎	齋藤	竹村	同	福井	樋口	伊與田	日木	浅見	山本	堀田
留子	静賀	多吉	永吉	喜代	末尚	福	しん	仲城	人	とよ	八重	徳房	松子	英子	はる	尚







ちり残るもみち濡してふる雨にさむさ身に泌む冬の夕くれ  
ちり残る庭の木の葉を誘ひつゝふりしきるなり冬の日の雨  
いつのまか雪は雨にとかはりけむ軒の雫のしけくきこゆる  
さと川に大根を洗ふ少女子の袖をぬらしてしくれふるなり  
木からはふきしつまりし窓の外に落葉を叩く雨の音する  
小春日のきのふには似すけさは又木の葉と共にふる時雨哉  
散り残る木の葉さそひて寂しくも柴の戸たゝく村しくれ哉

贅 澤

子等の爲よき薬なりいさゝかも奢りゆるさぬわか國のいま  
おこるとは思はざるらむよそ目には浅間しき迄みゆる装も  
夥多荷をつらせて嫁く人もありひき締るへき世をは忘れて  
今の世を思ひ見すしていとゝしくよき衣纏ふ少女子もあり  
大寺の庭にやくらにいにしへのおこりきはめし跡を残れる  
着かさりて誇り顔なる人見れば説かまほしかり今の世の様  
たゝならぬ御世をはよそに着飾りて遊ひ暮せる人も有けり  
あるか上に又も求めて身の程を思はぬ人そうたてかりけり  
いまの世を忘れたるらむ價高きしなをあつめて誇りある人  
戦へる世をも後目にきかさりて芝居見にゆく人もありけり  
なれ安きおこりの心ひきしめむ皇軍ひとのうへをおもひて

戦へる世をよそけにも都人はれ着まとひて今日もいてゆく  
奢れりと思はさりしも恥かしと思ふこと多し今の世にして  
徒らに奢りきはめて身の程をしらぬ人こそあはれなりけれ

雁

かりかねのおち来る方やなかる覽鳥羽田も今は町に開けて  
鳩の海あしの葉さわく夕かせにのりて落來る天つかりかね  
月すみて夜風身にしむ都路のそらを横きるかりのひとつら  
有明の月かけあはきやまの端をよこきりてゆくかりの一行  
いつかたをさしてゆくらむ月の夜に列を亂さて雁なき渡る  
松かせのしらへにあひて雁のなく音さひしきあけ方のそら  
幾千里わたり來つらむ月清き夜空にみゆるかりのいつら  
月さえてふけゆく夜はに懐かしき雁の聲こそ聞え來にけれ  
みいくさに従ふ吾子をしのひつゝあふくみ空に雁なき渡る  
夕榮の名残のこれるみなと江に陰をおとして渡るかりかね

空閑地利用

なれぬ手に都のひとと鋏とりて庭のすみまでかての種まく  
かひかての芋を葱をとつくりけり三坪にたらぬ庭を拓きて  
見る度に鋏あたまして草原もいつしか廣き畑となりぬる  
われも亦葱をうゑけり庭すみの木を切り拓き土をかへして

岡尾多賀  
山本はる  
安藤さく  
竹村仲城  
端敏子  
同井と人  
福井と  
樋口八重  
三木正廉  
安藤さく  
竹村仲城  
今北冬子

岡尾多賀  
山本はる  
日木松子

安藤さく  
堀田末尙  
内藤美千代  
竹村仲城  
安藤さく  
同尾人  
岡尾多賀  
廣瀬久榮  
外村秀子  
正富淑子

内藤美千代  
竹村仲城  
内藤美千代  
福井とよ



蓬生も畑となりけり女われ針をもつ手にくはふるひつゝ  
學ひやの子らも青物作りけりひろき河原を日毎おこして  
捨おきし土も拓きてくさくさの畑もの作る世となりけり  
となり組老も若きも立出て、あれたる土をけふもたかへす  
隣とちこゝろ合せて草野をは畑にせむとてくはふるふ見ゆ  
とり小屋もしつらへにけり八千草に任せおきつる庭の片隅  
くろくゝとすき反へされぬ昨日迄子らの遊ひし町の空地も  
はつかなる空地も畑としたりけり都の人もくはをふるひて  
わかせとの空地を町にまかせけり青葉作りの料となすへく  
一坪の庭のあき地もいかしつゝ、青葉作ればたのしかりけり  
ちりあくた捨てし空地に菜を葱を作るもたのし隣くみにて  
あつものゝ料ともなりぬ道のへの空地にまきし青菜なれ共  
學屋にかよふなるも師の君と庭をひらきてものゝ種まく

川 千 鳥

ふけ渡る霜夜の月に川千鳥啼くこゑさむし上加茂のさと  
川ちとりしきりになけり芝居見てのほせ心地に橋を渡れば  
夕されは六甲山嵐さえくゝていな川の川原に千とりしはなく  
月さゆる加茂の川原の夜嵐にふきたてられてなく千鳥かな  
すきまもる川かせ寒き旅やかた火桶いたきて千鳥をそきく

かれあしのをよくも見えて川風の寒き夕に千とりなくなり  
さゆる夜の寢覺にきけは哀にも千鳥なくなり加茂の川原に  
瀬の音もさむけにひく鴨川の霜夜のやみに千鳥啼くなり  
珍らしく千鳥なく音をきゝてけり川邊の宿に一夜やとりて  
枯芦の風にそよける大川のつゝみに來れば千とりなくなり  
ふきあるゝ夜風寒くも身に泌みて佐保の川邊に千鳥なく也

忍 苦

くろかねの固きにまさる心もて耐へしのはなむ國の爲には  
苦しともいはてありなむ天の下ひとつの家となさむ爲には  
みことのり出て、吾等も苦しみに耐へん心のいや勝りつゝ  
大きな業なしとけむそれ迄は苦しかりとも耐へ忍はなむ  
笑ひつゝ語りあふ日もありぬへし忍ひに忍ふいまの苦しみ  
苦しさを心の中にひめおきていろにも見せぬ人のゆかしさ  
大きな國の患ひ思ひみれば身の苦しさはいふにも足らず  
國民はなかきとし月しのひ來ぬあたよりうくる重き苦しみ  
何事もたへしのはなむ國の爲いのちさゝくる人をおもひて  
國をおもふ心一つにいかはかり苦しき事も耐へしのはなむ  
なきせこか名を汚さしと苦しきに堪へ忍ひてもはけむ若妻

南 天

庄山冬子 齋藤しん 同 同 浅見英子 同 同 伊與田徳房 白石井朝子 平岡よし子 庄山冬子 今北静子 端敏子 竹村仲城子 宮崎末福 堀田天留 岡田天留

同 岡よし人 平岡よし人 同 同 今北静子 山本はる子 浅見英子 竹村仲城子 今北静子 同 同 岡田天留 内藤美千代 宮崎福



つゝおとに鶴たちて南天のみのふたつ三つつちに落ちたり  
南天のみはうるはしくはえにけり薄雪ふれるせとの垣根に  
ひえとりに實をとられしと老人はあかきぬのまく南天の枝  
雪兔つくと子等は南天のあかきみあまたとりて來にけり  
白雪のふりしく庭のかたすみ南天のみのうつくしくはゆ  
あか／＼と朝日にはえぬ霜かれてさひしき庭の南天のみは  
ひえとりのあさるかまゝにこほれけり雪の朝のにはの南天  
つくはひの水にうつりて南天のいろうつくしき霜枯のには  
ふさ／＼とみのりて赤き南天に雪のかゝりていよゝ美しくし  
又しても鶴の來てついはみぬいろうるはしき南てむの實を  
ゆきの如霜のおきたるせと畑にいろうるはしくみのる南天  
さとの子かかすみあみはるもりかけに鶴なきて南天のみゆ

米英膺懲の 大詔を拜して

來るへきときは來りぬ國こそり打たてはやまし此あた國を  
ふたゝひは立ち得ぬまでに懲してむおほ詔きもにきさみて  
きもを嘗め薪にふして國たみか今日をそ待ちしいさ戦はむ  
國舉りふるひたちけり朝またきラシオのつくる君か御言に  
おのつからむくいめぐりて横しまの國は亡ひむ時置すして  
大君にこたへまつらむかにかくと道の外ゆく敵をきためて  
すめ國を汚さゝらなむおのも／＼後の守りをいよゝ固めて

中堀喜代  
伊與田徳房  
白井朝子  
樋口八重  
安藤さく  
三木正康  
福井とよ  
平岡よし  
端敏子  
伊與田徳房  
伊與田かす  
竹村仲城  
三木正康  
福井とよ  
竹村仲城  
庄山冬子  
石橋永吉  
安藤さく  
伊與田徳房

時雨會詠草第一輯を刷行してから早くも八年を経まして今年の三月には第二百回の開會致  
しましたので是非此機會には第二輯を刷行したいとかねて希望してをりましたが支那事變  
を契機として國際狀勢は次第に急激の變化を來し各種の物資にも欠乏を來すのでかゝる不  
急印刷物は遠慮すべきものと一時は其企を抛擲せんとまでに考へたのでありますすが翻て考  
へると此八年間には随分諸種の事情により會員の動搖もあり時局に對して歌道奉公といふ  
意味に詠まれたる歌も相當多數で且選歌だけの總數でも五千首となつてをり此時局の終焉  
を待つてもいつまでといふ際限がある譯でもなくその上編纂の材料も追々散逸する患もあ  
り旁々意を決して刷行することゝ致しましたさて着手してみると相當入念に綴り込んでお  
いた積りの詠艸が見當らなかつたり一面印刷所では紙の配給不足のため引受困難と申出た  
りして思ふ様にならぬ爲に唯散逸を免るゝ手段として印刷し製本しておくといふ程度にと  
ゝめたので斯くの如き貧弱なものとなりましたがこれも私の罪ばかりではないと御許しを  
願ひます。

本編輯に當りて安藤作子刀自岡田天留子刀自平岡よし子刀自淺見英子刀自中堀喜代子嬢の  
努力に俟つ所非常に多かつたことを特筆して茲に深く謝意を表します。

昭和十七年初夏

竹村仲城



類題一覽

(左下傍の数字は昭和の年次を示せり)

新年の部

歳旦十五  
 初荷十二  
 新年眺望十一  
 元旦十二  
 初夢十三  
 新年獸十  
 新年宴會九  
 追羽子十五  
 鏡餅十  
 歌御會始十  
 新年雪十三、十六  
 新年松十四  
 としの始神詣して十六

春の部

迎春十三  
 若芽さしたり十四  
 待鶯十三  
 御苑鶯十二  
 紅梅九  
 梅見頃十五  
 寺花十四  
 觀櫻十二  
 春庭十一  
 木蓮十一  
 紀元節十五  
 春日十三  
 松間鶯十六  
 古寺鶯十二  
 隣梅十二  
 梅盛十一  
 山寺花十六  
 櫻にそへて九  
 春海十二  
 藤十  
 春淺し十六  
 未霞十一  
 聞鶯九  
 初鶯十一  
 探梅十  
 梅香遍十二  
 一海邊花十五  
 雲雀十三  
 春雨十一  
 筍十三  
 早春山十五  
 都早春十一  
 鶯馴十  
 初聞鶯十二  
 田家梅十三、十六  
 花曇十、十一  
 花満山九  
 朝雲雀十  
 春霜十二、十六  
 草餅十三  
 柳あをむ十四  
 氷解十二  
 閑庭鶯十二  
 朝梅十二  
 社頭梅十四  
 待花九  
 花供養十二  
 春山十五  
 社頭春十四  
 堤堇九

夏の部

遊絲九  
 薊花十一  
 折蕨十一  
 旅餘寒九  
 落花十一  
 春日東山にて十  
 餘寒月十  
 社頭落花十六  
 花見の圖に十  
 山家藤十四  
 遠蛙十  
 土筆十三  
 暮春山十三  
 風前柳十二

秋の部

早天十一  
 老鶯九  
 時鳥頻九、十五  
 閑居梅雨十一  
 絲瓜十二  
 初夏旅十  
 夏魚九  
 都夏月九  
 青田十三  
 閑庭牡丹十四  
 海水浴九、十六  
 山梔花十  
 水泳十  
 噴水十一  
 殘花十二  
 聞時鳥十三  
 梅雨近十二  
 蚊九  
 初夏庭十一  
 夏虫九  
 夏水十一  
 雷十四  
 名所新樹十四  
 夏石九  
 加茂祭十  
 樗九  
 田家杜若十四  
 若楓十三  
 待杜鵑十一  
 湊梅雨十六  
 蚊遣十二  
 夏旅九  
 夏石九  
 夏家十一  
 遠雷十一  
 初夏の頃比叡山にのほりて十四  
 夏獸十  
 祇園會十  
 待涼風九  
 茶摘十二  
 若葉十五  
 卯花十五  
 喜雨十五  
 都首夏十六  
 夏湖十三、十五  
 夏田家十二  
 夜水雞十三  
 初夏の頃比叡山にのほりて十四  
 夏虫九  
 氷柱十、十一  
 苗代九  
 時鳥遠十五  
 更衣九  
 麥秋十五  
 初夏朝十二  
 夏花十五  
 夏月十六  
 竹風涼十六  
 梅の實十一、十五  
 名所螢十六  
 夏魚九  
 富士詣十



秋風 十四	山家秋 十四	山家早秋 十一	田家秋 九	故郷秋 九
野分 九、十五	益踊 十五	孟蘭盆會 十五	秋晴 十一	閑庭萩 十三
夜萩 十三	雨中萩 十一	故郷萩 十三	岡萩 十四	古寺萩 十六
尾花 十一、十三	葛花 十	女郎花 十、十五	朝顔 十	夕顔
桔梗 十	千屈菜 十	龍膽 十、十一	コスモス 十	秋海棠 十、十五
捕虫 九	聞虫 十六	名所虫 十二	草庵虫 十	雨中虫 十四
古戰場虫 十三	露滋 十五	野營露 十	踏露 十一	川邊鶉 十三
觀月 十三	池邊月 十四	海邊月 十一	雨後月 十二	月宴 十
月前菊 十三	公園菊 十四	野菊 十	秋聲 九、十二	秋雨 十二
秋霖 十六	秋旅 十一	秋田 十二	初秋風 十三	秋鐘 十六
茸狩 十三	暮秋夕 十二	秋魚 十	秋遠 九	雞頭 九
紫苑 九	仲秋會友 九	茸にそへて 十	秋鐘 十六	殘暑 十六
芋掘 十五	社頭紅葉 十六	海邊紅葉 十四	秋の日奈良にあそひて 十四	
朝冷 十一	秋夜長 十三			

冬の部

小春日 十五	殘菊 十五	落葉 十五	狂花 十	茶梅 十
夕時雨 十四	氷結 十一	海水 十三	行路霜 十二	名所霞 九
名所時雨 十一	都霞 十五	殘紅葉 九	初冬鳥 九	初冬街 十

雑の部

寒梅 十五	寒椿 十一	寒燈 九	川千鳥 十六	寒鴉 十
雁聲 十六	寒松 十	冬林 十一	冬山 十一	冬花 十二
冬鶴 九	冬旅 十二	冬日 十三	冬雨 十六	冬魚 十三
晴雪 十一	降雪早し 十三	車中見雪 十一	雪日歌會 十四	港雪 十
	炭櫃 十四	歲暮 九	軍國歲暮 十四	除夜 九

  

鹵簿を拜して 十五	奉祝皇太子殿下御降誕 九	伊勢詣して 九	教育勅語 十
祝賀會 十三	古稀賀 十四	曉天 十一	雲 十六
星夜 九	地震 十一	暮靄 十	夜雨 十一
雨垂 十四	雨街 十	雨中木 九	風 十五
舊都 十四	古寺 十四	市 十一	朝山 十
麓川 十	靜波 九	丘 十四	野逕 十一、十四
夕川 十	稚松 九	水 十	牧 九
苔 九	水害 十	竹影 九	激流 九
河水漲 九	子 十三	佛 九	巫女 九
母 十二	田家媪 十二	孤兒 十五	雲水 十六
山家翁 十二	産婆 九	商家娘 十二	大原女 十六
大工 九		看護婦 十四	下女 九







肥 十一 瘠 十一 拾 十 惜 九 眠 十三  
 往事は夢 十一 述 懷 十五 保 險 十四 遺 失 十六 就職難 九  
 勇ましきもの 十三 おそろしきもの 十三 支那の現状を 十一 犒 軍 十五 凱 旋 十一  
 戦 争 十三、十六 戦 禍 十五 航 空 十一 防 空 十二 防 牒 十六  
 銃後の務 十五 空閑地利用 十六 應召せられし人の父に 十四  
 米英膺懲の大詔を拜して 十六 韓信潜股の圖に 十一 靜御前のゑに 十三  
 大原女の圖に 九 やめる人に 十 文を手に文箱によりてうたゝねする人形を見て 十  
 をりにふれて 九、十二、十三、十四、十六 支那事變に際しをりにふれたる 十二

作者一覽

(いろは順) 「肩書の地名なきは總て京都なり」

大阪 伊與田房次郎 徳房 堺 石橋 永吉  
 今北 靜子 故 蓮 琢了 久龍 蓮 とめ 久子  
 端 敏子 東京 西田 チカ 故 堀田 末松 末尚 土田松人  
 外村 秀子 兵庫 影井 こと 岡尾 多賀  
 鎌倉 鹿江 鹿子 兵庫 影井 こと 岐阜 故 吉田 藤枝  
 竹村 仲次郎 仲城 竹村 文 竹村 佳子 後鈴木  
 東京 丹 澤 露 滋賀 高尾 泰司 廣嶋 谷川 ともゑ 夏山  
 曾根 源作 日本正言 曾根 まつ 日本まつ 恒村 京八

奈良 坪村 宏 郡馬 中野 善次郎 景善 恒村 たつ 東京 永野 幸恒  
 故村 田 さと 月見草 中堀 喜代 大阪 内藤 美千代  
 野口 智恵子 滋賀 大谷 兵甫 黒田 こと 白米 陽光 ひとり  
 故 山本 兼豊 横濱 山本 はる 松岡 遠吾  
 大阪 正富 淑子 福井 剛之助 剛之 福井 大三郎  
 福井 みち子 山口 小林 慶一郎  
 奈良 齋藤 しん 元青木 安藤 藤作 山口 浅見 英子 正廉  
 宮竹 長穂 北川 舜治 大津 三木 爲次郎  
 庄山 冬子 大阪 白井 朝子 西宮 宮崎 福  
 平岡 よし 日木 和子 大津 弘世 秋野  
 樋口 八重 大阪 廣瀬 久榮 樋口 貞一  
 大津 森 年子 大阪 森 きぬ 佐久間 孝子 元竹村



436  
30

昭和十八年二月二十八日印刷  
昭和十八年三月五日發行

(非賣品)

編輯兼發行人 京都市上京區紫野下鳥田町五〇番地  
竹 村 仲 次 郎

發行所 京都市上京區紫野下鳥田町五〇番地  
時 雨 會

印刷人 京都市下京區油小路通松原上ル  
松 崎 秀 雄

印刷所 京都市下京區油小路通松原上ル  
松 崎 印 刷 所



終